

うるま市地名散歩

名嘉山 兼宏

vol.26

塩屋（マースヤー）

川田の十字路から県道十六号線を赤道十字路向け、中塩屋バス停の前を通ると左側の建物二階の壁に「SALT★HOUSE」と書かれているところがある。はじめは喫茶店かレストランの看板だろうと何となしに通り過ぎていたが、よく考えてみると「SALT」は塩、「HOUSE」は屋のことです。「塩屋」



【塩屋にあるユニークな看板】

となり、沖縄ぐちにすれば「マースヤー」となる。なかなかオシャレなユニークな発想で面白い。

はなしはそれるが、一八五三年に来琉したペリー艦隊一行が大宜味村の塩屋湾を調査したときに、塩屋湾を「S H A H B A Y」（塩・湾）と記述しているが、これは方言のサー・スー（塩）が素直に表現されている。

上江洲下（イージンシヤ）

塩屋は王国時代末期に誕生した屋取集落でかつては上江洲の行政区内にあり、「上江洲下」、あるいは「上江洲下屋取」と呼ばれた。『球陽』には一八〇〇年代に度々住民が暴風や水害の被害にあったことが記されているので、上江洲下には、はやくから住民が居住していたことがわかる。

昭和十六年、上江洲から行政分離して「塩屋」が成立した。『泡瀬誌』によれば明治十六年頃の塩田所在地に「上江洲下浜」が見えるからすでにこの頃には塩屋の製塩は始まっていたと考えられる。

終戦直後の前原市時代に一時製塩が復活し「沖縄製塩株式会社」設立の記録がある（昭和二十二年）。塩田は「シナマー」（砂庭）と呼ばれ、ここで運動会をしたとの話も伝わるがその塩田の

跡地もいまはない。そしてこの一帯で塩作りがあったことを知る者は少ない。

塩のはなし

伝説によれば沖縄に塩の製法を伝えたのは源為朝（十二世紀頃）で湧川村（今帰仁村）の海岸とされている。記録としては「當國鹽ハ、羽地ノ懸内、我部村ニ始マル。」（今俗称シテ、我部ノ鹽屋ト云。直ニ海水ヲ汲ミテ、煮テ、シオトスル也）と『琉球国由来記』にある。

塩は人間の身体調整作用において大切なもので、日常の食生活のなかで塩がつかわれていないものはないと言われているほど活用されている。特に最近、自然塩・島マースが見直され、うるま市内で生産されている塩は内外から注目されている。

ものの本によると、給料を意味するサラリーは塩の支給を意味するラテン語の「サラリウム」が語源で、ローマ時代にはお金の代わりに塩が支給されたという。それほど塩は貴重なものであった。サラリーマンは、今は「月給取り」と解されるが、かつては「塩取り」だったのである。

塩・潮のつく地名

地名には生業（職業）によってつけ

られたものがある。塩屋はその字のとおりに塩を生産していることからつけられた地名である。他には、壺を作っているところが「壺屋」、かつては那覇市湧田楚辺原には「瓦屋」という地名もあった。本市内に浜屋があるが、これも生業地名ということができる。

本県内にある塩屋地名を調べてみると大宜味村の塩屋は「漏原に塩田の跡があり、地名はこれに由来する。」（『沖縄大百科事典』沖縄タイムス社）。恩納村にも塩屋があるが製塩に関する資料はない。しかし浜には塩焼き釜があったと伝えられている。糸満市にも潮平（スンザ）という地名があるが、そこにはかつて塩焼きする人々が住んでいたといわれる。

他県でも塩屋地名が数多く見受けられるが、いずれも海岸に位置し、製塩と関係した地名と考えられる。神戸市の塩屋町では、かつて藻塩焼が行われ、この名がついているが、景観の素晴らしい「須磨の塩屋」として知られている。他に温泉などからつけられた「塩」のつく地名が多数ある。

福島県いわき市の塩屋崎には、白亜の美しい塩屋埼灯台がある。美空ひばりの「みだれ髪」の歌詞に出てくる「塩屋の岬」はこの地で、その記念碑が建っている。